



平成24年8月6日
卓話 『文化芸術の力』
文化庁 長官
近藤 誠一様

皆さん、こんにちは。本日は文化芸術の力というタイトルですが、これは文化庁長官だからというより、今までOECD、ユネスコという組織に身を置き、また外務省、通産省、文化庁と三つの役所を経験しながら40年間、日本を見てきた経験に基づく私の考え方をご披露したいと思います。

今、世界が直面している金融危機、テロ、温暖化、エネルギー問題等の大部分は人間が自分で招いたものだと思います。人類はこの3~400年、大きく進歩しましたが、こういう新しい問題を招いてしまった。一体どうしてしまったんだろうというのが率直な疑問です。そこで思いついたのが、一つが人間の思い上がり、もう一つは司の論理という言葉です。

まず思い上がりです。所謂西欧近代化の大前提は、人間が理性によって作り出した民主主義や市場経済、科学技術などのシステムは完璧なもので、それを社会に導入すれば、最後には自然を超越できるんだという暗黙の了解があったように思います。しかし現状を見ると、先進民主主義国でも欲望達成型のポピュリズムがはびこり、市場でも同じ動きが金融危機を起こし、科学技術も大きな災害をもたらしています。これは3つのメカニズムさえ導入すれば問題が解決するという思い上がりとそのメカニズムの悪用が原因であると思います。

二つ目の司の論理。人は何らかの集団への帰属感が必要ですが、集団には常に自己防衛、勢力拡大という司の論理があります。政党なら選挙に勝つこと、役所なら権限を維持すること、会社なら利益を最大化するという絶対的な命令があって、

時として暴走する傾向がある。そこに属する個人はおかしいと思っても、それを発言すればはじき出されてしまう。個人とその個人が属するグループの利益の相反は実は昔からあって、例えば文学においてもそれが大きなテーマでした。

では、この思い上がりと司の論理に縛られることをどうやって防いだらいいのでしょうか。それは人が生まれつき持っている倫理観、バランス感覚、自己規律による欲望抑制の能力を発揮することで、個人と個人が組織の論理を超えて繋がることです。それをかなえてくれるいくつかの手段の一つが文化芸術だと、私は思います。

文化芸術をやるアーティストは固定観念にとらわれず、新しいものにチャレンジしています。そういうアートを通じて得た能力が、新しいパラダイムへの転換の閃きを与えてくれます。もう一つ、文化芸術は個人が芸術を通して自分を表現し、見る方はそれを理解するというコミュニケーション能力を培ってくれます。そのアートを通じて結びつく能力を養うことが、思い上がりや狭い組織の論理から脱皮する力を我々に与えてくれるのだと思います。

一人一人が組織の壁を超えて繋がることで社会を大きく動かしていく。今、そういう時代に入っているんではないかというのが今日の私の問題提起です。ご静聴ありがとうございました。

